

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 29 日現在

機関番号：33801
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2014～2016
 課題番号：26780382
 研究課題名(和文)現代バウムテスト理論の問題解決に向けた実証的研究

 研究課題名(英文)Research on the contemporary issues of Baum test

 研究代表者
 佐渡 忠洋(SADO, Tadahiro)

 常葉大学・健康プロデュース学部・講師

 研究者番号：60510576
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、バウムテストに関する4つの現代的問題を解決し、バウムテスト理論を洗練させ、実践者と研究者に信頼に足る知見を提供することである。現代的問題とは、昔の知見は現在どれほど活用可能か、集積された知見は今日の子ども理解に寄与できるか、多くの解釈仮説は単純化したものに還元するが、一線型的にだけ理解しない理論が必要ではないのか、指標の解釈仮説が洗練されていないのではないか。上記～の課題を解決すべく、文献研究と調査研究を行い、国内外の学術大会で発表を行い、順次論文として発表した。その結果、上記の課題を大半は解決ができ、実践者と研究者に知見を配信することができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to solve modern problems pertaining to the Baum test (Tree-Drawing test), and to then refine the Baum test theories. In this study, the following were considered as “modern problems”：1) Can we use old findings in the present practice?; 2) Does the accumulated knowledge contribute to sufficient understanding of today’s children?; 3) Many interpretation hypotheses assume simplistic viewpoints, but do we not need a more complex theory?; 4) Have the interpretation hypotheses in indicators been sufficiently discussed? My philological and investigative studies addressing the above four problems were presented at various academic conferences in both within and outside Japan. Additionally, some of the findings have been published in a paper in a journal. Thus, through the activities conducted during research period, I could answer the above problems to a considerable extent, and could derive useful information for practitioners and researchers.

研究分野：臨床心理学

キーワード：バウムテスト 樹木画テスト 理論 発達研究 比較文化研究 幹先端処理 早期型 投映法

1. 研究開始当初の背景

バウムテストは心理アセスメント技法の1つである。日本では最も使用頻度が高く、多領域で使用されており、各主領域からの評価も高い。しかし、従来の研究知見を臨床場面で用いる時、いくつかの現代的問題に突き当たった。申請者はこれまで綿密な文献研究からそれらを明確に提示してきた。

本研究で仮定された現代的問題とは次の4点である。

昔の知見は現在において活用可能か。
集積されてきた知見は実践的な子ども理解に寄与できるか。
多くの解釈仮説が複雑な要因をあまりに排除しているが、バウム表現を一線型的に理解しない視点が必要ではないか。
指標の解釈仮説が洗練されていないのではないか。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記の4つの問題を解決することで、今日のバウムテスト理論を洗練させること、そして地域で活躍するバウムテスト実践者へ信頼に足る知見を提供することである。

3. 研究の方法

【研究】 問題 に対して

この部分は2つの研究からなる。どちらも、現在と過去のバウムテスト・データを比較することで、今昔の一般的表現の差異を明確化することを目的とした。

第一研究は、1967年と2010-11年の中学生のデータを比較した。

第二研究は、1970年代と2010年代の大学生のデータを比較した。

【研究】 問題 に対して

この部分は知的側面の推測可能性に焦点を当てて研究した。

中学生のバウムテスト・データと偏差IQとの関係を、Karl Kochが着目した「早期型」という発達指標に焦点を当てて検討した。

【研究】 問題 に対して

この部分は2つの研究からなる。

第一研究は、同一対象者に異なる条件で二度のバウムテストを実施した10の調査から行った。10の調査とは以下の通りである。

同日群:同一対象者にバウムテストを二度続けて実施した。

差込群:同一対象者に質問紙法前後で二度のバウムテストを実施した。

1週群:同一対象者に1週間の間隔をあけて二度のバウムテストを実施した。

3ヵ月群:同一対象者に3ヵ月の間隔をあけてバウム

テストを二度実施した。

実施法群:同一対象者にバウムテストを集団法と個別法とで二度実施した。

縦横群:同一対象者にバウムテストを用紙縦長と用紙横長とで二度実施した。

大小群:同一対象者にバウムテストをA4用紙とB5用紙とで二度実施した。

操作小群:同一対象者にバウムテストを二度続けて実施し、二度目は教示を「別の実のなる木を描いてください」とした。

操作大群:同一対象者にバウムテストを二度続けて実施し、二度目は教示を「同じ樹種で別の形の木を描いてください」とした。

未来群:同一対象者にバウムテストを二度続けて実施し、二度目は教示を「その木の50年後を描いてください」とした。

第二研究は、2名の対象者にバウムテスト二枚法を計5回実施し、そのあとでそれらの描画をベースに半構造化面接を実施した。

【研究】 問題 に対して

この部分は大きく2つの研究からなる。

第一研究は、幹先端処理に着目して行った。幹先端処理の解釈仮説を洗練させるために、大学生のバウムと夢見の頻度との関連を検討した。

第二研究は、比較文化研究を通してバウムに現れる地域性・国民性を検討し、各指標の意味を再検討した。

【研究】

本研究を進めるにあたり、当初の計画以上に、バウムテスト研究において不可避の課題が表れた。そのためこれらの課題にも取り組んだ。さらに臨床実践的観点からも研究を行った。

4. 研究成果

【研究】

第一研究では今昔の中学生のバウムを比較し、昨今の中学生は枝を描きにくく、包圍線によって課題に取り組む傾向を見出した。それは今日の中学生が中間段階を飛ばして結果を得ようする傾向があること、体験の様相が時代によって大きく変化したことが考えられた。

第二研究では今昔の大学生のバウムを幹先端処理に着目して比較した。その結果、第一研究と同様の結果が認められた。

両研究の成果は明らかに、今日の発達基準を再構築する必要性を示している。この課題に取り組むことが今後の課題となった。

これに関する成果は、論文1と発表12である。

【研究】

中学生のバウム表現と偏差IQとの関連を検討した結果、「早期型」指標によって対象者の知的側面を推測することは極めて困難

であることが判明した。
この成果は投稿準備中である。

【研究】

第一研究では、全群を総合的に検討し、枝と樹冠の表現、および用紙の使い方は、バウムの中でも“ゆらぎ”の程度が広い特性を持っており、系列表現においては変化を示しやすいこと、他方で、幹と根はバウムの中でも“ゆらぎ”の程度が狭い特性を持ち、系列表現においては変化しにくいこと、を見出した。

第二研究では、“自我の柔軟性”の観点から対象者の系列表現を検討し、そもそもバウム表現が変わるとはどういう意味か、変わらないとはどういう意味かを検討した。

これに関する成果は、論文2・5・9と、発表1・3である。

【研究】

第一研究では、大学生の夢見の頻度とバウムの幹先端処理との関連を検討し、夢の見やすさとバウムに現れる境界性との間には関連がないことを見出した。したがって、幹先端処理に表象される境界性の意味を再検討する必要性を論じた。

第二研究では、世界各国で収集されたバウム表現を検討した。子どものバウムにおける「一線幹」の差異、大学生のバウムにおける「樹冠」の形態の差異から、各指標と表現の意味が再検討された。

これに関する成果は、論文4と、発表2・6・8・10・13・14・15である。

【研究】

この部分では、臨床心理学の実践的問題、バウムテストに関する文献研究と文献一覧補遺の作成、バウムテストの特徴をより理解するための他の描画法の研究を行った。

これに関する成果は、論文3・6・7・8・10・11・12と、発表4・5・7・9・10、および著書1である。

まとめ

本研究によって当初目的とした課題は概ね解決できた。しかし、検討は新しい課題を呼び起こし、今後も継続した検討が必要であることも実感した。

今後検討が求められる課題は、相当のデータから今日の発達基準を再構築することである。本研究の範疇ではこれに十分対応できなかったため、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計12件)

- 1) 佐渡忠洋・岸本寛史・山中康裕 今昔の中学生のバウムテスト表現の検討: 1960年代と2010年代との発達指標を通して。

明治安田こころの健康財団 研究助成論文集, 49: 77-86, 2014. 査読なし。

- 2) 佐渡忠洋 バウムテストの「ゆらぎ」の構造. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士論文. 2015. 査読あり。
- 3) 佐渡忠洋 心理臨床家の支援をめぐって. 常葉大学臨床心理事例研究, 6(1): 37-40. 2015. 査読なし。
- 4) 佐渡忠洋・西尾彰泰・堀田亮・磯村有希・加納亜紀・高井郁恵・邦千富・堀田容子・山口美紀・山本眞由美 大学生の夢見に関する調査研究(第二報): 夢見頻度と生活習慣との関連. CAMPUS HEALTH, 52(1): 338-340. 2015. 査読なし。
- 5) 佐渡忠洋・松本香奈 用紙の向きとサイズを変えて実施したバウムテストにおける「はみ出し」表現の検討. 臨床心理身体運動学研究, 17(1): 25-36. 2015. 査読あり。
- 6) 佐渡忠洋・岸本寛史 スイスにカール・コッホをたずねて. 常葉大学健康プロデュース学部雑誌, 10(1): 157-163. 2016. 査読なし。
- 7) 佐渡忠洋 場をめぐって. 常葉大学臨床心理事例研究, 7(1): 31-34. 2016. 査読なし。
- 8) Maeda, T. & Sado, T. Psychotherapy for a Client with Atypical Depression. *Japanese Journal of Clinical Studies for Mind & Body*, 18(1): 19-32. 2016. 査読あり。
- 9) 佐渡忠洋 バウムテストの枝と包幹線について: 「否定」の教示を用いた調査から. 箱庭療法学研究, 29(2): 67-75, 2016. 査読あり。
- 10) 佐渡忠洋 守りをめぐって. 常葉大学臨床心理事例研究, 8(1): 39-43. 2017. 査読なし。
- 11) 佐渡忠洋 バウムテスト研究における評価: Kochの58指標を用いた経験から一致率と作業手順を考える. 常葉大学健康プロデュース学部雑誌, 11(1): 55-64. 2017. 査読なし。
- 12) 平田直哉・佐渡忠洋・滝浦孝之 日本のバウムテスト文献一覧Ⅱ(補遺・2011-2015年). 常葉大学健康プロデュース学部雑誌, 11(1): 121-133. 2017. 査読なし。

〔学会発表〕(計15件)

- 1) 佐渡忠洋 バウム幹先端処理における“ゆらぎ”の構造. 日本心理臨床学会第33回秋季大会, 8月23-26日, 2014年。
- 2) 横山春香・前田章・佐渡忠洋 夢見の頻度とバウムテストの幹先端処理との関連. 日本心理臨床学会第33回秋季大会, 8月23-26日, 2014年。
- 3) 佐渡忠洋 四ヶ月の縦断調査にみるバウムのゆらぎ. 日本ロールシャッハ学会第18回大会, 11月29-30日, 2014年。
- 4) 中島郁子・佐渡忠洋・古谷学 風景構成

- 法を通してみた大学生剣道選手のパーソナリティ特徴. 日本臨床心理身体運動学会第 17 回大会, 12 月 13-14 日, 2014 年.
- 5) Sado, T., Horita, R., Nishio, A. & Yamamoto, M. Effect of the answering procedure on the score of mental screening test for Japanese university students: Comparison with Paper-and-Pencil and Web. ACHA 2015 Annual Meeting, May 26-30, 2015.
 - 6) Sado, T., Yama, M., Kishimoto, N., Baratgin, J. & Jamet, F. Cross-cultural Study on Children's Representations in the Baum Test: A Statistical Perspective. The 5th International Conference of Expressive Psychotherapy. August 3-6, 2015.
 - 7) 佐渡忠洋 バウムテストにおける評定の一致率と作業手順. Koch の 58 指標を用いた経験から. 日本心理臨床学会第 34 回秋季大会, 9 月 18-20 日, 2015 年.
 - 8) 中島郁子・佐渡忠洋・古谷学 劇団員のバウム表現について. 日本心理臨床学会第 34 回秋季大会, 9 月 18-20 日, 2015 年.
 - 9) 中島登代子・佐渡忠洋・古谷学 役者の風景構成法における田の表現: 「役を生きること」と田のおさまり. 日本心理臨床学会第 34 回秋季大会, 9 月 18-20 日, 2015 年.
 - 10) 岡村宏美・吉野真紀・佐渡忠洋 日本人青年女性のバウムテストにみられる幹先端処理の特徴: イラン人青年女性と比較して. 日本心理臨床学会第 34 回秋季大会, 9 月 18-20 日, 2015 年.
 - 11) Sado, T., Furutani, M., Maeda, T. & Nagaoka, Y. Developmental Study on "Disorganized-Structure" and "River-Is-Standing" Phenomena in the Landscape Montage Technique. The 4th International Symposium on Education, Psychology and Social Sciences. May 10-12, 2016.
 - 12) Sado, T., Maeda, T. & Furutani, M. Comparison of Baum test results between the 1970s and 2010s. 31st International Congress of Psychology. July 24-29, 2016.
 - 13) Kimura, S. & Sado, T. Comparison on the Personality of Junior High School Students between Cambodian and Japanese through the Tree-Drawing test (Baumtest). International Association for Cross-Cultural Psychology 23rd International Congress. July 30 - August 3, 2016.
 - 14) 佐渡忠洋・鈴木壯 発達過程におけるバウムテストの幹先端処理の変化. 日本心理臨床学会第 35 回秋季大会, 9 月 4-7 日, 2016 年.
 - 15) 木村佐枝子・佐渡忠洋 バウムテストから見たカンボジアと日本の中学生のパーソナリティの比較. 日本心理臨床学会第 35 回秋季大会, 9 月 4-7 日, 2016 年.

〔図書〕(計 1 件)

- 1) 佐渡忠洋 見立て. In; 中島登代子 (編) 臨床心理学の展開 魂の癒しをもとめて. 創元社, pp. 204-207. 2016.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐渡忠洋 (SADO, Tadahiro)

常葉大学。健康プロデュース学部・講師

研究者番号: 60510576